

PETRONAS SYNTIUM TEAM

PETRONAS SYNTIUM TEAM REPORT

スーパー耐久シリーズ2008
第5戦「スーパー耐久 岡山500kmレース」
2008年9月6-7日

■予選:9月6日 天候:曇りのち晴れ 気温32°C(午後1時現在)

およそ1ヶ月以上のインターバルを経て迎えたスーパー耐久シリーズ2008の第5戦。今回は、岡山国際サーキットで500kmレースを展開するのだが、PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの2台は1週間前にマレーシア・セパンサーキットでの12時間耐久レース「Merdeka Millennium Endurance (MME)」に参戦したばかり。クルマ、ドライバーともに連戦というハードなスケジュールとなった。なお、50号車はMMEの決勝中に他車のアクシデントに巻き込まれて、クラッシュ。惜しくもタイヤとなった。また、ドライブしていたファリック・ハイルマンも病院で精密検査を受けることに。幸い外傷等はなく、今回は大事を取って岡山戦を欠席した。結果、Aドライバーに柳田真孝を迎え、チーム内で実戦キャリアを積む吉田広樹がBドライバーとしてステアリングを握ることとなった。

このところ不安定な天候が続く日本列島だが、サーキットのある岡山・美作市界隈は金・土曜とまだ蒸し暑さが居残り、強い日差しが照りつける好天気恵まれた。

午後1時20分、Aドライバーの予選がスタート。PETRONAS SYNTIUMチームは、まず28号車の谷口がピットを離れ、アタックを開始。計測5周目に自己ベストタイムとなる1分35秒758をマークした。谷口を追いかけるようにしてベストタイムをマークしたのが、50号車の柳田。計測3周目に1分35秒655を刻み、Aドライバートップに踊り出た。

Bドライバーのアタックは、午後2時5分から。Aドライバーとは逆に、今度は50号車の吉田が早めのコースインを行い、アタックを始める。前日から精力的に走行を重ねた成果を披露しようと奮闘する吉田は、周回ごとにタイムを削る力走。A、B両選手の合算タイムで決勝グリッドを決めるタイムアタックに今季初トライし、計測4周目に自己ベストタイムの1分36秒326をマークした。一方、28号車に乗り込んだ片岡龍也。やや遅めのタイミングでアタックを開始。計測3周目にマークした1分36秒116がベストタイムとなった。

A、Bドライバーの合算タイムにより、PETRONAS SYNTIUMチームでは、28号車が3番手、50号車が4番手を獲得。決勝はセカンド・ローからの発進となった。

■決勝:9月7日 天候:晴れ(一時雨) 気温28°C(午後 現在)

前日からの快晴が続いた岡山国際サーキット。午前8時5分からのフリー走行では、まぶしいほどの朝日がコースに差し込んだ。PETRONAS SYNTIUMチームでは、まず28号車に谷口、50号車には柳田が乗り込みコースイン。両ドライバーとも自分のステイメント中にベストタイムをマークし、それぞれ片岡、吉田へとスイッチ。ピットでは決勝を想定したシミュレーションを行い、最終確認を行った。

正午を挟み行われるピットウォークの終了を待っていたかのようにサーキット上空には重い灰色の雲が張りめぐり、天候が怪しくなってきた。すると間髪いれず風に乗って雨粒があつという間に地面を濡らしてしまった。幸いにも、短い時間の通り雨で終わったが、再び強い日差しを浴びた路面からは、むっとした暑さがぶり返し、体力的にも厳しいレースを予感させることとなった。

セカンドローに着いたPETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの2台。28号車には谷口、50号車は柳田が乗り込み、スタートを切る。コース上は、通り雨の影響で、路面の一部がまだ濡れている不安定なコンディションではあったが、谷口は躊躇せずトップを狙いに行く。そして早くも2周目のヘアピンで逆転に成功。首位に立った。一方、柳田は前後車両とのポジション争いを演じ、3位で周回を重ねていたのだが、11周目にイレギュラーピットイン！スローパンクチャーに見舞われたため、タイヤ4本を交換し、11番手でコースへと復帰。思わぬハプニングで足元をすくわれたが、すぐさまペースを取り戻して次々とライバルを蹴散らしながらポジションアップ。36周終了時には、予選と同じ4番手まで振り返っていた。

PETRONAS SYNTIUM TEAM

レース開始から1時間、トップ28号車の谷口は依然としてハイペースをキープ。後続に30秒以上の大差を築き、快調に周回を重ねていく。一方で、50号車の柳田は45周を終えてピットイン。今度はルーティンワークとして吉田へとドライバー交代し、タイヤ交換と給油をスムーズに済ませた。それから2周後、今度は28号車がルーティンのピットイン。片岡へ交代、50号車同様、タイヤ交換と給油を行った。上位陣が最初のルーティン作業を済ませて迎えた59周目。再び28号車がトップに立ち、2番手には50号車が続くという1-2体制が確立する。

50号車にさえ大きなリードを奪った28号車は、若干足回りに気になる要素を抱えてはいたが、片岡がクルマにできるだけ負荷をかけないよう、うまくペースをコントロールした。一方、初の2人体制でレースを迎えた50号車の吉田。先輩ドライバーに囲まれるプレッシャーの中、及第点のペースで周回を続けることに成功した。途中、コース上でスピンした車両を間一髪で回避したものの、その直後にコースアウトを喫するというオマケがついたものの、初の大役を無事に果たし、91周終了でピットへと戻った。また、トップを快走する28号車の片岡はすでに2位以下に1分以上のマージンを保ち、独走状態。94周終了でピットインしたが、谷口には交代せずに給油を済ませ、連続でスティントを担当することになった。

レースは後半に入ると、50号車の後方で激しい3位争いをしていた2台のフェアレディZのうち、No.1 Zが頭ひとつ抜け出して、次第に50号車の差を詰めてきた。終盤、一騎打ちの可能性もあると先読みしていた柳田は、最後のピット作業時間を短縮するため左2本のみタイヤを交換。万全の体制で戦いに挑んだ。No.1 Zはこれより23周遅れてのピットインを行い、同様に左2本のみ交換してコースに復帰した。だが、その背後にピタリとつけた柳田が難なく逆転。2位死守に成功した。また、2位以下に大量の差をつけていた28号車の片岡。終盤はペース配分をコントロールし、磐石の走りを披露。今季3勝目の達成に加え、135周を走破したPETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPEの2台が、今季4度目の1-2フィニッシュを果たした。

●鈴木哲雄監督

特に大きな問題はなかったものの、ドライバーもスタッフもみなよく頑張ってくれたと思います。28号車はウォーニングランプが走行中に点灯しましたが、レース後のチェックしたところ、表示の問題だけでハード面には影響がなかったことがわかりました。50号車は吉田選手が思った以上に落ち着いていい仕事をしていました。最後のタイヤ2本交換は、4本交換よりも15秒短縮できるので作戦として遂行しました。次の菅生も勝利を目指します。

●No.50 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPE

柳田真孝

序盤の緊急ピットインは、スローパンチャーが原因でした。クルマのバランスがおかしくなり、ピットインすると無線で伝えました。場所を特定できなかったため、4本すべて交換してコースに戻りました。その後はクルマの調子も良くなり、また吉田選手もパッシングが難しい岡山で、健闘してくれたと思います。合格点をあげたいですね。去年は悔しい結果に終わっただけに、今年は是が比でも28号車に続いてチェッカーを受けたいと思っていました。最後のピットインでタイヤ2本交換をしたのも作戦のひとつでした。

吉田広樹

がんばりました！ コース真ん中でスピンしていたクルマはうまく避けることができたのですが、そのあとコースアウトをしてしまったので、まだまだ気をつけないといけないことがあると感じました。僕たちのクルマは序盤に緊急ピットインをしたのですが、その後がんばってポジションを上げて、チームとして1-2フィニッシュができたのはとてもうれしいです。レースの中から課題も見つかったので、またレベルアップするよう努力したいと思います。

●NO.28 PETRONAS SYNTIUM BMW Z4M COUPE

谷口信輝

レースの内容としては完璧でした。レース直前の雨でスタートではまだ路面の一部が濡れていましたが、ここで勝負するのがいいだろうと頑張って逆転したのが、今日の勝利のポイントだったと思います。片岡と交代後には、ウォーニングランプが点灯するなどヒヤリとしましたが、無事勝てて良かったと思います。

片岡龍也

クルマもいい状態だったし、体力的にも問題がなかったので2スティントそのまま走り、チェッカーを受けたわけですが、ちょうどハイランドでは谷口さんが逆のパターンを担当していたので、今回は僕が行こうと思いました。予選はトップを取れず、やや苦しみましたが、速さをアピールできるパフォーマンスはできたので良かったと思います。